



publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa  
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2013.11.07

## ひとのいのちみじかくもろし

道因寺住職

相馬 豊

皆さん、こんにちは。今ほど紹介を受けました、白山市の道因寺の住職をしております相馬豊と申します。よろしくお願いたします。今年も浄光寺さんの報恩講にご縁をいただきました。報恩講ということ、私たちが真宗の門徒、一人ひとりにつきましても、一番大きな仏事と言つてよろしいかと思ひます。その親鸞聖人が聞き得た南無阿弥陀仏の教え、その教えを今私たちが聞いていく。改めて聞いていくのだと思ひます。とがここに開かれてくるのだと思ひます。

### 教えを聞く

私たちが教えを聞くというのは、教えを知識として対象化して聞くのではありません。こうやって私たち一人ひとりが人間に生まれ、そして今日まで生き続けてきた、様々な出来事がそれぞれの方の中にあると思ひます。そして、そういうものを抱えながら亡くなつていかなければならない。そういう事実の中にあつて最初から教えというものを聞くのではなく、私たち一人ひとりが人間に生まれてきて、そして抱え込んでいる苦しみ、悩みのところ

から教えに聞いていく、そのことが大切なことではないかと思ひます。

教えと申しますのは、もともとは色も形もありません。しかし、その色も形もないものが、具体的に人間の言葉となつて、具体的に文字となつて今日まで伝えられております。今ほども『正信偈』のお勤めがありました。親鸞聖人が文字とされたものです。しかし、私たちはその正信偈をお勤めする際に、ややもすると横にうってある節譜というものに気がし過ぎて、どこで声の調子を上げて、どこで声の調子を下げて、どこで声の調子を下げればいいのか、そのことばかりに目がいくということがあります。そうしますと、大切なことをどこかで忘れていくということがあります。

でしようか。そうしますと、その正信偈の一字、一字が実は教えとわしているかという、願いを持っているかということです。その願いに出遇つていく、これが私には大切なことではないかと思ひます。仏教を知識として対象化して学ぶのではなくて、教えというものを通して願いに遇つていく、このことを大切にしていきたいと思ひます。

### 意

言葉というのは単なる言葉としてあるわけではありません。そこには人の意(こころ)というものが言い表されています。例えば「ごめんなさい」、「ありがとう」という言葉があります。これは日常生活の中でよく私たちが使う言葉であります。しかし、これがもしもこういう言葉遣いだったらいかがでしょうか。「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ」とこういうふうに一字、一字を切つて、発音として「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ」とこう相手方から言われたら、心は通じますでしょうか。こういう発音

としての言葉を聞いたら、逆に苛立ちを覚えるということがあるのではないでしようか。私たちが、「ごめんなさい」、「ありがとう」とその言葉の中に何を感じているかというところ、まさにこの意というものを感じとっているのではないでしようか。

この「意」という漢字ですけれども、旁をみると面白いですね。上が「音」です。下が「心」です。声となった音が心に響く。だから本当に「ごめんなさい」と本当に謝っているんだな、申し訳ないことをしたんだな、大変なことをしてしまったんだなど、言葉となった音が心に響いてくるから許せるのではないでしようか。あるいは「ありがとう」とそこに人の心が通じるから嬉しくなり、感謝していく。つまり言葉というものは発する音が心に響くということをもっているのではないでしようか。

その言葉が響くということ、それが教えそのものではないかと私は思っています。教えという言葉が私に響いてまいりました。それを親鸞聖人は「聞く」と抑えられたんだと思

ます。聞くとは、言葉となった響きを聞いていくということではないでしようか。何気ない日常の言葉遣いの中で「ごめんなさい」、「ありがとう」、その言葉の響きの中に相手の真心、意というものを受け取るからこちら素直になつていける。それが先ほど申しましたように、単なる発音だったら苛立ちを覚えたり、腹を立てたりするということがありません。つまり、言葉というのはすべて音が心に響くということ、大きな意味を持つているということです。この響きの中に私たちが平生忘れていたことを聞かせてもらう「聞く」という行為が出てくるのではないでしようか。この響きというものを聞いていくことが、まず大切なことだと思います。

### 出会う

親鸞聖人もまさに生涯の中でこの言葉の響きに出遇った方だといつていいと思います。言葉の響きによって改めてそこで気付かされていった。それが法然上人との出遇いということではないでしようか。人に出

遇うということを通して、人の語る言葉の響きに出遇うていった。その言葉の響き出遇うていった時に「紛れも無い事実だな」と、そう頷いたわけですね。人間に生まれて様々な悩み、苦しみを抱えながら生き続けている、その事実というものを言い当てる下さった言葉の響きに出遇われた方が親鸞聖人だといつていいと思います。

親鸞聖人は、そんなに難しいことに出遇ったわけではないです。ごく当たり前の事実に出遇ったので



「二歳の祈り」 竹内昭平

す。人間に生まれて、今日まで生き続ける中において様々な悲しみに出会い、苦しみに出会い、悩み不安を抱きながら孤独の身を生き、最後に静かに息を引き取っていくのが人間、それが私の事実です。その事実の響きを聞かせていただいたのではないでしようか。難しいことを聞き取ったのではなくて、ごく当たり前の事実を聞いていったということ、それが私たちが何気なく使っている「生活」という言葉遣いの中にあります。

この生活という漢字、二つの漢字から成り立っています。ひとつは「生」、生まれる。生きる。生き続ける。そして「活」、活動とつていいと思います。この生活の「生」という漢字は、仏教用語の中ではよく使われます。しかし「活」という字をなかなか仏教用語として見出すことはできません。なかなかこの「活」という字は仏教の言葉遣いの中では、あまり使われていないのです。それでその「活」という字がどういふふうに使われているのか少し調べてまい

りました。先ほどの『正信偈』の中に「源信広開一代教」という一文があつたと思います。そこに源信という日本の方の名前が出てきました。その源信が著されたのが『往生要集』という書物です。その『往生要集』を開いていきますと「活」という字を使った仏教の言葉が出てきます。「等活地獄」と。「活」という字は、仏教では具体的に何を表現しているかという、地獄というものを表わしているということと、地獄と「活」という字は、仏教用語で調べると等活地獄。地獄ということを表わすときに使われている漢字だということが窺えます。

### 経済活動

生きるということ、生き続けている私たちは、まさにこの活動ということと密接な関わりを持って生活が成り立っています。生き続けるためには必ず活動が伴わなければならぬということとです。活動とは具体的にどういう活動を私たちが行っているかと申しますと、経済活動です。社会人となって働くということと

す。職業に従事するということです。その経済活動は、私や私の家族に何を生み出してくるのかということ、生活の条件を整えるということ。これが私たちが活動する大きな目的ではないでしょうか。私たちは、私や私の家族の生活の条件を整える為に経済活動という活動をする。社会人となって汗水かいて失敗、挫折、叱責いろんな事を受けながらなぜ一生懸命に活動に従事するかというと、私や私の家族の生活の条件を整えるためです。

私自身もそうです。今日、明日、浄光寺さんの報恩講にお話をお願いされ、自分の車で来ました。まさに経済活動で手に入れた収入によって生活を整えていく条件として車というものを手に入れる。

その生活の条件の中に衣食住というものがあるのではないのでしょうか。私たちの食べるもの、着るもの、住むもの、すべて経済活動によって私や私の家族を支えていく条件を整えるということになっていく。しかし、「生活」という字が二つの漢字で成り立っているにもかかわらず、い

つの間にか、現代という時代の中で生まれたこと、生きるという事、生き続けていることが忘れられていくような気がしてなりません。

九月の第二週目、ブエノスアイレスで次期オリンピックが東京と発表されました。東京と決まった次の日の新聞をご覧になっていませんか。もう既に東京オリンピックの半径八キロ内にコンパクトに収まった会場の様子がもう既に描かれておりました。現在はまだ東京湾です。しかし、凶面はもう出来上がっているわけです。七年後にはそこに施設が造られて、選手村が造られていく。そうすると何がこの国の中に起こるかといいますが、やはりそれだけの施設を建てていかなければならないという活動が起こります。世界各国から多くの人たちが来るといふことになれば、何が整備されなければならないか。交通網を整備しなければならない。通信施設を整備しなければならない。あるいは、宿泊施設を整備しないといけない。当然外国の方も来られるのですから、外国の方々の文化を学

ばなければならない。言語を学ばなければならない。習慣を学ばなければならない。そういうビジネスが活動という形でもうこの国では動き出しております。

実は、私自身もあの東京が決まった瞬間に何を思ったかという、七年後ならもう既に北陸新幹線は東京まで通っているなあと。命あれば日帰りできるなあと。なんらかの競技を見に行きたいなあと。そういう思いが自分の中にもありました。そうすると自分の中にあるのは、何かというと、東京まで行くための経済活動をしなきゃならないなということと、このようにいつの間にか生まれたこと、生き続けてきたことを忘れていくのではないのでしょうか。

一方で、この国には今まさに生き続けていることで大変に苦しんでいる方々がおられます。東日本大震災です。故郷を奪われて、そして全国各地に仮の宿をもっている方々。仮設住宅に今だに住まいされている方々。今だに生きること、そのことに悩み苦しんでいる方がいます。

しかし、日本という国の中にあつ

て何が優先順位になるかというのと、七年先に東京でオリンピックを開くということが決まってしまうたわけです。そうするともうすべての目はオリンピックへ、オリンピックへといくのではないのでしょうか。日本の古い諺ことわざの中に、「二頭追うものは、一頭も得ず」とこういう諺があります。二つのことを同時にすることは出来ないということ。どちらかを犠牲にしていかなければならないということ。そうすると、やはり私たちの間に、生まれ、生き続けていくことをたずねていくということが忘れられていき、いつの間にか私や私の家族を支えていく生活の条件を整えることに目が向いていくのではないのでしょうか。生活という言葉は二つの言葉で成り立っており、「活動」という面と、そのことを支えていく「生きる」ということの意味をもう一度たずねていく、それがこの生活という言葉なのではないでしょうか。

**存在の問題**

私たちは、経済活動を常に優先事

項としていき、その優先事項によって多くの人々が生きること、そして生き続けていることを忘れていく。そういう姿が毎日のテレビの報道で放送されていると思います。私たちが、生きるということは何なんでしょう。生きるということは、単に生きるのではなくて、常にそこには孤独という大きな問題を抱え込んでいます。この孤独というのは、孤独とは違います。私たちが日常の中で味わうのは、孤独感の方です。多くの人がいる中であって、何か一人だけ寂しい思いをしているとか、何か一人だけぼつんと取り残されたような感じになったりする孤独感というのは、私たちは持ちます。これは誰でも味わってきていることです。しかし、存在自体は何かという孤独感ではなくて孤独なんですね。生きるということ、孤独という問題です。孤独というのは、存在の問題です。独り生まれ、独り死ぬという問題です。私たちが意識の一番底に抱え込んでいるのは、孤独の問題です。私がここにいるという存在の問題です。独り生まれ、独り亡

くなっていかなければならないという大きな問題です。その存在の問題を今私たちは抱えているわけです。その存在が常に問われてきているわけです。存在の問題として孤独というのが私たちの大きな問題です。私たちは先ず、最初に生まれてきたという存在の問題があります。生まれてきた時、私たち一人ひとりには、まだ名前がついていないということ。名前をつけるということ。私たちが、体験してきたかと思えます。名前をつけるということは、容易たやすいことではないということもご存知だと思えます。ご自分のお子さんにお名前をつける。先ず存在が私達に問うわけですから、生まれたばかりの赤ん坊が私たち一人一人に問いかけてくるわけです。その存在に対してこの赤ん坊をどう呼べばいいのだろうか。そこで悩むわけですよ。どんな名前をつけてあげればいいのだろうか。どう呼んだらこの子は応えてくれるかということですよ。

苦勞をされたと思います。国語辞典を引つ張つてきたり、漢和辞典を引つ張つてきたり、そして夫婦間でどんな名前にしようかな、ああでもない、こうでもない。この文字にしようか、この漢字にしようか。いろんなかたちで悩み苦しまれたと思います。それは、先ず存在がそこにあるからです。その存在を私達はどう認めていけば、どう呼べばいいのだろうか。だから名づけなければならぬ。そこに大変な苦勞をしているんですね。実は私も苦勞をしまして、長男の名前をつける時、市役所まで行って、そしてこういう名前にしますと一応提出したわけですね。でも躊躇ちゆうちゆうしました。本当にこの名前がいいのだろうか。カウンセラー越しの女子職員の方に「すみませんけど、もう一回ちよつと名前を考えさせてください」と。そして、後ろのロビーに行つて三時間悩みました。頭の中にいろんな言葉が浮かんでくるんですね。でもしつくりこないんですよ。最後はもうこの言葉にしようかと、この漢字にしようとして名をつけて提出し

ました。  
私たち一人ひとりが名づけられて  
いる名前、その一つひとつにも大変  
存在の問題があるわけです。どう呼  
んだらいいのだろうか。どう反応し  
てくれるだろうか。そこに両親の、  
兄弟たちの、祖父母たちの願いがか  
かっているということです。その  
願いが言葉となつて、響きとなつて  
いるのが、名前というものでしょう。  
その名を名付けるということも存在  
の問題のひとつでないでしょうか。  
この存在の問題ということが孤独と  
いうことです。

### マザー・テレサ

その孤独ということを経験中で一  
番よく知っていた方がマザー・テレ  
サという方ではないでしょうか。亡  
くなつてしまわれましたけれども、  
マザー・テレサという方は、インド  
のカルカッタの街で、誰にも相手に  
されず、見捨てられて、路上でただ  
死を待っている人々を抱きかかえ  
て、死を待つ家に連れていかれた。  
道端で誰にも存在を認められず、見  
捨てられて、相手にされない方、そ

の方を抱いて連れていく。そして、  
そこで最期に人間の尊厳を取り戻し  
ていく活動をされた方がマザー・テ  
レサたちです。そのマザー・テレサ、  
修道女の方がその教会の中で毎日朝  
の礼拝で使われた祈りの言葉があり  
ます。「私は慰められるよりも、私が  
人を慰めることができますように」、  
「私が人から理解されるよりも、私  
が人を理解することができますよう  
に」、「私が許されるよりも、私が人  
を許すことができますように」、「私  
が愛されるよりも、私がひとを愛す  
ることができますように」、この祈り  
の言葉を修道女たちは、毎日、毎日  
捧げられたといわれています。

私たちはどうでしょうか。私が理  
解されますように、私が慰められま  
すように、私が許されますように、  
私が愛されますように、常に私たち  
は自分を中心とした見方をしてい  
くのではないのでしょうか。誰からでも  
なく、先ず自分が認められて、理解  
されて、愛されていく、そのことが  
大切だと思っています。しかし、マ  
ザー・テレサたちはそうではないわ  
けです。出来ないということを知つ

ているわけです。出来ないからこそ  
祈らずにおれないということでは  
「私が慰められるよりも、私が人を  
慰めることができますように」、出  
来ないということを知っているの  
です。だから、その言葉の中に響く  
真実を聞いていくのでしょうか。何気  
ない言葉の響きの中にまこととい  
うものを見ていく。人間に生まれてき  
て、生き続けていく事実の中でま  
ことの言葉によつて救われていく。

私たちは、そうではなくて自分を  
中心とした自分の願ひということば  
かりを常に押し立てている。私が愛  
されますように。私が理解されます  
ように。私が許されますように。常  
に私というものを中心に立ってい  
る。しかし、マザー・テレサたちは、  
孤独ということを知っているからこ  
そ、出来ない中であつて祈らずには  
おれない。その言葉の響きの中に真  
実が語られています。

今、私たちの現実の社会は経済活  
動を中心として、私や私の家族の生  
活を支えることばかりに目がいつて  
しまい、私や私たちの家族が、生ま  
れ、生き続けているということをもど

ここに忘れていのではないでしょ  
うか。生きるとはどういうことなの  
か。なぜ死ぬことがわかつていな  
がら生きなければならぬのか。そこ  
に大きな問いかけがあるのでしょ  
うか。

### 体解

先ほど「三歸依文」を唱和しまし  
た。その中に「大道を体解して」と  
いう言葉が出てきます。しかし、私  
たちはこうやって教えを聞いていく  
ということをする時は必ずこのよう  
になるのではないのでしょうか。理解  
しよう、理解しよう。理解しようと  
ころに立っていくのではないでしょ  
うか。教えを何とかして理解しよう、  
解つていこうと。しかし、三歸依文  
は体解です。体解とは頷くという  
ことです。体で頷くということです。  
だから仏教というのは、理解するも  
のではなくて、頷くということをも  
っているのではないのでしょうか。  
頷いていけるということです。でも  
その頷くということが、私たちはな  
かなか出来ないわけです。自分で頷  
くということは出来ないのです。そ

れは本当のことに遭遇から領くし  
かないわけです。親鸞聖人が聞き得  
た南無阿弥陀仏の教えというのはま  
さにまことの言葉です。

親鸞聖人は、「信」という字をよく  
使われます。この信をこういう言葉  
でよく表したりします。「信知」と。  
そしてこの「信」という字の横にど  
のように書き記されたかといいます  
と、「まこと」と。その「信」とは、  
どういうことなのか。

「信」という字を分解してみます  
と、「人偏」ですから人です。「言」  
は言葉です。「人の言葉」、しかし、  
ここが難しいところです。

## く さ む す び

### 事実を聞く

私もここにこうやって立っている  
のですけれども、いつも家族に言わ  
れます。言っていることとやってい  
ることが違いますか。人前では  
いろんな話をするけれども、現実の  
家庭生活に入ってしまったら、言っ  
ていることとやっていることが違  
いませんかということです。それでは  
まことにはなりません。まこととい  
うのは、体と言葉がひとつになっ

いるということ。私みたいにお  
話する時と家族という時と全く違わ  
ないということ。常にひとつの  
ことになった時をまことというので  
す。人の言葉が、その人の生きざま  
が言葉をそのまま表わしている。そ  
の言葉が響いてきたから、親鸞聖人  
にとつては法然上人という方が「よ  
きひと」となっています。まことの  
言葉の響きを語ってくれた人。その  
響きに出遇うていった。その生きる  
方向と態度を私はあなたから教わり  
ましたと。それを親鸞聖人は、まこ  
とといったわけですよ。だから、ま  
ことというのは本当に身と体と言  
葉がひとつにならないとできない。  
言っていることとやっていることが  
違うというのは、それは偽物になっ  
ていくということ。そのまこと  
の言葉を体解、頷いていくといふこ  
とです。言葉の響きを聞いていくと  
いうことです。そこに大切な事柄が  
あるんだと思います。

この頷くというのも難しいことを  
頷くではありません。一番最初に  
申しましたように、人間に生まれて、  
様々な悩み、苦しみ、悲しみを抱き

ながら孤独の身を生き、最後静かに  
息を引き取っていく、これは誰のこ  
とですかということ。誰のこと  
なのでしょう。そこに頷くことが  
できるかということ。こうやっ  
て自分が人間に生まれてきたといふ  
こと、そこに本当に頷いていかなけ  
ればならないものがあるんですよ。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏の言葉  
の中にその事実というものを聞き得  
ていかれたのです。事実というのは  
もう曲げることができないといふこ  
とです。それは今私たちも抱えてい  
ます。どういう事実を抱えているの  
か。

お参りに行っている先のおばあ  
ちゃんがよくこんなことを言うので  
すね。「あの頃はよかった」と。あの  
頃とはいつですかと尋ねますと「こ  
の家に嫁いでくる前、実家で兄弟姉  
妹、両親と一緒に過ごしたあの頃が  
自分にとつては輝いた頃や、あの頃  
に戻りたい」と言うのですよ。でも  
おばあちゃんたちは知っておるの  
です。いくらあの頃に戻りたいと言っ  
ても戻れないということ。それが  
事実ではないでしょうか。自分の考

えや思いがいくらあったとしても、  
戻れないというものを持つていると  
いうことです。それがひとつの事  
実として私たちに伝えられていま  
す。老いという事実ですよ。そして  
いくら健康に留意していても病にな  
らなければならぬ。そして「死に  
たくはない、死は怖くない」と言っ  
たとしても、いずれ死んでいかなけ  
ればならないということです。若さ  
を失い、健康を失い、そして最期、  
死んでいかなければならない。これ  
が紛れもない事実ではないでしょ  
うか。曲げることができないもので  
それがまさに聞き得たということ  
でしょう。紛れもない事実を聞き得た  
ということですよ。

現代の私たちは、宗教というも  
のはどういうものかと言っている  
か申しますと、自分の考えや思い  
が通ることが宗教だと思っていま  
す。その象徴として現れるのが、お  
正月の三ヶ日、日本で一番お参りに  
行く神社があります。わずか三日間  
で三百万人の方がこの神社に行き  
ます。明治神宮というところでは  
三百万人ですよ。初詣に三百万人の



「自画像」ふじわのん

方がその神社に行く。それは何をしに行くんでしょうか。祈りです。でも、その祈りの中身はというと、自分の考えや思いが一年間通りますようにですよ。決して事実を聞き取りに行くわけではありません。自分の考えや思いや都合がこの一年間通りますようにと祈りに行きます。

ところが仏教はそうではないのですよ。事実を聞き得たということですよ。老いと病と死というものを抱えているということを教えてくれるんですよ。未だかつて人類の中でこの三つから逃れた方はいないということです。いくら経済活動で発達した文化が築かれ、科学技術が進歩し、医療技術が進歩したとしても未だかつて、誰一人として逃れていないと

いう事実ですよ。だから仏教というのは、人間の生活の条件を整えるわけではないわけです。逆に人間自身が抱えている問題を明らかにしてくれるのでしよう。

### ひとのいのちみじかくもろし

健康を失い、若さを失い、死んでいかなければならない中を生きていくということはどういうことなのでしょう。親鸞聖人は、八十五、六歳の時に『正像末和讃』という御和讃を作られました。その御和讃の中で『阿弥陀経』に出てくる「命濁」という言葉が使われて一首作られました。その命濁という漢字の横に「ひとのいのちみじかくもろし」と書き記されています。八十六歳の折です。生まれて八十六年間生き続けてきた中で命というものを間近に見、そして人の存在を確認したり、私自身を確認したりした時に、命とはどういうことかと。八十六歳の親鸞聖人が書かれたのは「ひとのいのちみじかくもろし」と。味わい深い言葉ではないでしょうか。「いのちみじかくもろし」ではないのですよ。「ひとの

とついているのですよ。「ひとの」といえば、これは自分を含めてということですよ。私もということですよ。私のいのちみじかくもろしと。その中で偶然にも人間に生まれ、生き続けているということですよ。そこに人間に生まれてきたということの厳粛さ、深さというものがあるのではないのでしょうか。

ただ父母を縁として生まれてきた

ものから私たちは常にいただいている。そして全体は短いです。長いようだけれども短い命ということですよ。今ここに人に生まれ、生き続けて、そして生活の条件を整える活動に一生懸命です。しかし、活動という面が強くなればなるほどいつの間にか生まれたこと、生き続けていくということが忘れられていくので

私たちに一人ひとりには、生活という大きな暮らしがあります。しかし、その生活は決して経済活動が中心ではなくて、二つのことを中心としなければ生活は成り立たないので。経済が優先になればなるほど逆に生きていく人の姿が見えなくなっていく。見えなくなっていくことは、いのちが見えなくなっていくことですよ。いのちが見えなくなっていくことは、我が身が抱えている自分の考えや思いが通らないものがあることを忘れていくということです。どうにもならない老いと病と死、曲げることのできないの考え、思い、都合を抱えながら今ここにいます。ところが、私たちは頷うことができないので

すよ。いくらここで話して板書したとしても領けないんです。道理はわかるけれどもということ。受け入れられないということ。私たちは、決して死というものを受け入れることは出来ません。

これもお参りに行って先のおばあちゃんがよく使う言葉なんです。「長生きしたい」、「長生きしたい」と言われるのです。最初、分らなかったのです。「長生きしたい」、「長生きしたい」とこう言われるけれども、長生きしたいならば、そこには必ず目標があったり、目的があるのではないのでしょうか。そのことを尋ねてみると、黙ったままなんです。目標があるわけでもなく、目的もあるわけでもなく、ただ長生きしたいというのです。分らなかったんです。何で「長生きしたい」、「長生きしたい」というのか。ようやく分かりました。「長生きしたい」としか言い表せないんです。この目標や目的があるとかないとかではないのです。言葉として「長生きしたい」としか言い表せないんです。それは何かというと、失うということの辛

さと怖さを知っているからです。失うことの辛さと悲しみを知っているんですよ。だから、連れ合いと一緒に築き上げてきたこの世界を失いたくない。今あるこの世界を失いたくない。それが言葉として「長生きしたい」、「長生きしたい」なんです。失うことの辛さと怖さと悲しみを知っていると、辛さと怖さと悲しみを知っておるんですよ。それが本心ですよ。

私の中にもあります。家族と別れていくということの辛さと儂さ、いろんな事を思い描きます。やはり本心はいくら教えを聞いても失いたくないなど。それは本心です。教えの言葉を聞いていても、本心は失うことが怖いのです。でも事実を事実として受け入れていかなければならない。その事実というものを見せてくれる世界、その中に自分というものを置いていく。そうすると受け入れることのできない、頷くことのできない自分が見えてきます。

一方で教えを聞いている自分もいるわけです。二人の自分がいるわけ

です。失うことの辛さを知っている自分、失いたくないといっている自分、そして教えを聞いて事実だと知っている自分、そこに心の痛み、悲しみがあるのです。その悲しみの中に誰を見出していくか。私というものを見出していくのが教えそのものではないでしょうか。聞いて解るというのじゃないのです。聞きながら悩み苦しんでいる私の存在が先ずそこにあるということが大事なことでないでしょうか。聞いて解るのではないのです。聞いたことを問

いとして悩み続けていかなければならない私がいまよということでしょう。だから教えを聞くというのは、私というものに出会うということです。私というものに出会うということが大切なことではないでしょうか。そしてその私には数限りない願いがかけられているということ。自分の名前一つにしてもそうです。その願いプラス自分というものを支えてくれる多くの方々、その自分にはどんな願いがかけられているのか。個人の願い、あるいは多くの亡き人の願い、いろんな願いがこの

私の中にかかっている。その願いの声に耳を澄ませていくということではないでしょうか。教えに出遇っていく、願いに遇つていくということが大切なことではないかと思えます。先ず今日はここまでといたしまして、お話を終わりたいと思います。どうも失礼いたしました。

《へんしゅうこうき》

◇平成二十五年十月十七日、「浄光寺報恩講・お逮夜」の法話録でございます。今年もお忙しい中、相馬先生にお話いただきました。「ひとのいのちみじかくもろし」、そのお言葉から普段、いのちの事実から目を背けるような生き方をしている我が身を知らされます。長生きしたいけれども、死んでいかなければならない。そのどうすることもできない絶対矛盾を抱える身をどう生きるのか。まことの言葉に耳を傾けずにはおれません。誠に勝手ながら当方において抜粋、編集させていただいたものであることをお断りいたします。

◇左に年中行事が記してございます。万障繰り合わせの上、ご参詣いただきたく存じます。

除夜の鐘	十二月三十一日	午後十一時半
修正会	一月一日	午前0時
お太子さん	三月二十日	午後一時
孟蘭盆会	七月十三日	午前六時
追弔会	八月十三日	午前十時
報恩講	十月十七日 十八日	午後一時半・夜七時 午前十時半